

〔書評〕

桜井茂治著

『中世京都アクセントの史的研究』(一九八四)をよむ

金 井 英 雄

著者・桜井氏には、アクセント史に関して

『古代国語アクセント史論考』(一九七五)

『中世国語アクセント史論考』(一九七六)

『新義真言宗伝「補忘記」の国語学的研究』(一九七七)

などの論文集があり、夙に健筆家としてその令名がある。

この度は、全くの新稿として一三四六ページに及ぶ大作が出た。

ずしりと重い。その序論によると、『補忘記』の国語学的研究の出版

以後「今日まで身辺の雑事を切り捨てて、この仕事に熱中した。そ

して気がついてみると、まる六年の歳月が流れ、約三千枚の原稿と

なつて机上に積まれていた。それが本書である。」という。また、「あ

とがき」には、「最後に、こうしてふり返つてみると、我ながらよく

やつて来たなと思う。」とある。まずは著者の御努力に敬意を表した

い。出版に際しては、文部省から昭和五十八年度一般学術図書出版

助成金を、著者の勤務先・国立音楽大学からは昭和五十七年度特別

研究費が与えられている。先の三書と同じく、この度の出版も桜楓

社からである。各方面から高い評価を得ていること、今更申し上げ

る迄もない。

ところで、日本語のアクセント史に関しては金田一春彦著『四座

講式の研究』(一九六四)があり、今も主導的役割を担い続けている

が、最近のものとしては、秋永一枝著『古今和歌集声点本の研究』

(資料篇が一九七二年に、索引篇が一九七四年に、そして、研究篇(上)が一

九八〇年に出ている。)があり、また、奥村三雄著『平曲譜本の研究』

(一九八一)がある。『古今集』声点本、そして『平曲』諸譜本を資料

とする二大論著に加え、今ここに真言宗所伝の論議書を資料とする

桜井氏のこの書を得た。資料の種類や年代から見ても三者三様のアク

セント史が出揃いつつあることを同学の士と共に慶びたいと念う。

本書は、六篇から成るが、各篇は独立の論文と称してもいい位の

まとまりを夫々持つている。即ち、第一篇から第五篇までの各篇は、

『仮名声』『釈論百条第三重』『大疏談義』『開合名目抄』『補忘記』と

いう五種の資料文献ごとに一篇を与え、その一篇の中で他の四種の

文献も比較・参照して分析を進めるといふ形を採っている。そして

第六篇は、いわば(総まとめ)で、著者の最も意を用いたところと

目される。

第一篇から第五篇までの各篇は、資料文献によって多少出入りはあるが、ほぼ次のような構成を持つている。

一 資料文献についての解説

二 その資料文献に見える節博士の記述

三 節博士の分析によるアクセント研究

四 全体の総括

第六篇は「中世京都アクセントの総合的研究」と題されており、

第一章 総合的研究の目的と方法

第二章 資料の性格と相互関係

第三章 品詞別に見た「型の変化」の様相

第四章 品詞別に見た「個別の変化」の様相

第五章 中世京都アクセントの変化における過程的構造

の各章から成っている。

以上の六篇の他に、巻頭(目次の前)に「序論——目的と方法——」が、

巻末に「あとがき」、そして「事項索引」「人名索引」「資料名索引」

「文献名索引」がある。

序論で著者は、本書で問題にしたかった(原文には「問題にしなかつた」とあるが)三つのことを挙げてゐる。

第一は、古代アクセントから近代アクセントへの変化の過程を史的にとらえること。

第二は、歴史の全体像を知るために、体系的变化とならんで個別的变化についても研究し、その実態や原因について考究すること。

第三は、先の第一・第二の結果をふまえて、中世におけるアクセント変化の過程的構造を明らかにすること。

「体系の変化」「変化の過程」「過程的構造」等の魅力的な用語に幻惑されかねないが、著者の研究目標は明白である。

著者は、「日本語のアクセント史における中世という時代は、文字

通り古代アクセントから近代アクセントへの過渡期的な時代であった。」(序論)という観点に立つ。そして既に「アクセント体系変化の時期について」「国語と国文学」第39巻第9号・第11号所載。のち「中世国語アクセント史論考」に再録)において、京都アクセントの体系変化の時期を「上限」「下限」という次元で捉え、型の変化のタイプによる変化の時期のずれを問題にしている。

ところで、アクセント変化には、「音韻変化の一種としてのアクセントの変化」の他に「形態変化としてのアクセントの変化」があり、両者を区別して扱うことはアクセント史にとって重要なことである。そのことの指摘が金田一春彦「音韻変化からアクセント変化へ」(『金田一博士米寿記念論集』所載)に見える。

本書の著者は、この指摘をうけ、前者を「体系的变化」、後者を「個別的变化」と呼び、特に個別的变化の探究によって本書を特色あるものにしてゐる。本書が用いた論議資料の範囲で中世の京都アクセント史の中の個別的变化にどのような特徴が見られるかについて著者は次のようにまとめている。(要点を示すにとどめることを許された)。

「第一は、〈個別の変化〉は、自立語には起こるが、付属語(助詞、助動詞)には、ほとんど起こらない、ということである。」(一三二七—七六)

「第二の特徴は、〈自立語〉の中でも、品詞によつて〈個別の変化〉の起こる割合が異なるということである。それは、ひと言でいうと、名詞、動詞には多く、形容詞、形容動詞には、いたつて少なく、形容動詞には〈個別の変化〉というよりは個別的なゆれが目立つて多いという傾向である。」(一三二七—七六)とした「形容

動詞」は「副詞類」の誤りだろう。」

「第三の（個別の変化）の特徴は、さまざまな異なった変化の原因が働いていることである。その主なものとそれによって変化した品詞をあげると、次のようなものがある。

①類出する語や活用形のアクセントへの類推……名詞

②表現効果を目ざす型への変化……動詞、名詞

③語構造的に特異なものの一語化……形容詞、動詞、副詞

④語の機能からくる音声（プロミネンス）……副詞（二三二八ペ）

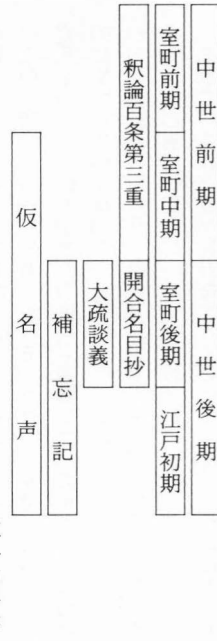
これらは本研究の成果をよくまとめ得ている。敢えて長く引用する所以である。

本書の今一つの特色は、これまで余り知られていない、そういう意味で新しい資料を大胆にとりあげたことである。

論議資料に見える節博士は、著者もしばしば指摘するように、基本的には確かにアクセントをよく反映するようだ。唯、節博士が誰によって何時頃付されたかが不明だったり、一語に複数あったりして、扱いかねるものが多い。たとえば、金田一春彦著「国語アクセントの史的研究」（一九七四）には、本書がとりあげた「仮名声」は、「アクセントの註記が不徹底で、資料としての価値は必ずしも高くないようだ。」（二三三ペ）とあり、版本の「開合名目抄」は、「最初は版本ではなく、写本で伝えられてきた、それがあつた時代に版本になつて現われた、という場合もあり、原著者が註記したとは必ずしも言えない。このような場合は版本の前にあつた写本を検討しなければならぬ。」（二四〇ペ）そういう文献の例としてあがつているものである。さらに「仮名声」の場合は、墨譜の他に朱譜があり、しか

も著者は写真で調査している。「あとがき」に見える「我ながらよくやつて来たな」という感慨は、さこそと思われる。

ところで著者は、本書で用いた五つの文献の、資料の性格から見た文献の相補関係を示すものとして次のような図を掲げている。



この図について次のような説明がある。

「このように、五つの（文献）の相補関係を图示してみると、完全ではないにしても、中世の京都アクセント史の全域にわたつて、それぞれの（文献）が、相互に補い合つて、一つの歴史的な流れを保つていことが伺えることは事実である。

ちなみに、いまそれらの相補関係を説明するならば、「釈論」で中世前期を代表させ、一方、「補忘」で、中世後期をさぐる。その間、「開合」「大疏」で、中世後期を詳細にあとづけ、そして、最後に、「仮名」で中世前期から後期にかけての流れを追いかける、ということになるだろう。」（二一七八ペ）

この図は、いろいろな意味でももしろいが、著者が作図で示した教育的配慮は見事と言う他ない。

ところで本書には、「中世」という語でどの範囲の時代を指すかについての特別な議論はない。言及と言え、三七〇ページに、

「このアクセント史の中世と言う時代、これは長くそして複雑な変化のおこる時代である。まず、古代と近代とはさまれた中世という時代は時間的にかなり長く南北朝時代から江戸時代中期までを包含する。そしてこのあいだに、二つの大きな型の変化の時期がある。その一つは、先にのべた南北朝から室町中期にかけての変化、もう一つは江戸の中期におこった変化である。」

とある位なものである。変化の過程を見る、という本研究の目的から言えば、時代区分の問題は重要だろう。この図はいろいろ問題を含むが、著者が「中世」という語で指す時代の範囲を知る一助にはなる。

さて、著者は、序論の中で「本書の中で筆者がもつとも力を入れたところ」として「中世のアクセント変化を過程的構造としてとらえようと試みた。」こととする。そして、「結果的にある程度の成果はあがつたように思う。」とつましやかにその満足の程を示している。この過程的構造については、先に紹介した第六篇の目次からもうかがえるように、第五章がそれに当てられている。その最終節（これは本書の最終節でもあるが）は、「まとめ—中世京都アクセント史の構造—」と題されている。率直に申し上げよう、終に私は、著者の言う〈過程的構造〉の何たるかを理解し得なかつた、と。

この最終節の中で著者は「その過程的な構造とはなにか、」と問う。そして、「〈体系的变化〉と〈個別的变化〉は、それぞれ異なった原因によって起こっているけれども、体系全体として見た場合には、アクセント体系全体の移りゆく姿の中で、相互に関連し合っていると言つてよい。」と言う。では、どう相互に関連し合っているのか。

その説明は見出せない。それどころか、一三一—一六ページの「〈体系的変化〉と〈個別的变化〉」の条には、「こうした二つの異なった変化が、一つの京都方言という言語体系の中ですんでいく場合、相互の関連はどうか、という問題があるが、一応、二つの変化は、それぞれ独自に進展していったらうと考えられる。」とさえある。一応としたあとでの考え方の転換は示されていない。今少し著者のことばを引くことを許されたい。第六篇の第一章総合的研究の目的と方法の第二節は「方法について」と題され、その方法の第4項は「中世の京都アクセントにおこった変化の過程を構造として明らかにする。」（一—一六〇—）とあり、次のような説明がある。本質的な問題を含むので全文を引く。

「従来のアクセント史の方法は、一つの体系から一つの体系に移つた二つの体系の姿を比較して、そこにどんな変化がおこっているかを明らかにすることであつた。ところが、この変化を過程的な構造としてとらえる本書の方法では、そのような二つの結果と結果の比較はもちろんであるが、それだけでは満足しない。その変化をいくつかのちがつた角度から観察して、変化が徐々に段階的にすすんでいく様相を、なるべく明らかにしようとする。それが、品詞別であつたり、あるいは型そのものの変化としての、体系的変化と個別的变化だつたりするわけだ。」

そして、このような見方をするることによつて、一つの体系がもう一つのあたらしい体系に移つていったすじ道もより明らかになるだろうし、また、一方では、次に問題にする変化の直接的、具體的な要因を解くカギをつかむことにもつながるはずである。」（二—一六〇—）

このあたりで、先の最終節の「まとめ」の副題が「中世京都アクセント史の構造」とあること、そして、言語学に「共時態」「通時態」という用語があることを思い起こすことは無駄ではあるまい。しかし、今の私には、「歴史の構造」という言い方は、魅力的な比喻以上の何ものでもない。著者の教示をまちたいと思う。

さて、本書が主たる資料とした五つの文献をすでに挙げたが、はたしてこれらは、京都語の資料であるのかどうか。この点について、特別の、またまった議論はない。注の形でではあるが、論議の曲節の地域性について著者は次のように述べている。

「それぞれの時代、とくに、中世という時代の文化の中心としての京都の位置ということを考える場合、この種の仏教文化の一つとしての論議で、京都以外の方言が、体系として使われる余地が、はたしてあつたらうかと考えてみると、たしかに、図式的には論議が行われた土地の方言を思い浮べることはできるが、実際に、その可能性は少なかつたのではないか。(中略)

それよりもむしろ、『補忘』の中にある、

詞字ハ、ハレ依レ仮名高下ニ以テ洛陽之詞ヲ為シ正可レ習レ之ヲ(貞享版下巻)

という地域性に関する記述を重要視したい。(一一七九頁)

五つの文献の中、『仮名声』だけは本来高野山系の伝書であり、他の四文献は新義派真言宗のそれに属する。地域性は『仮名声』の場合に特に問題になるが、著者はこの場合にも京都方言のアクセントとみて間違いないとし、その理由として、次の二点を挙げてゐる。

(1) アクセントの類別がどのような型にわかれるかという点で、院政時代の『類聚名義抄』、鎌倉時代初期の『四座講式』、室町末

期の『補忘記』などの文献における類別のわかれ方と基本的に一致している。これらの諸文献は、ともにそれぞれの時代の京都方言のアクセントを表記したものである。したがって、『仮名声』の音譜に反映しているアクセントも同様であると推定される。

(2) 論議だけでなく、古代から中世にかけての仏教音楽がすべて京都方言を基本にして成り立っているという外部徴証によるもので、とくに、そう考えることをさまたげる事情がないかぎり、そのように推定してよいと思う。(三五八頁)

(1)は、『仮名声』の、たとえば二音節名詞の音譜に反映するアクセント体系において、いわゆる四類と五類とが異なる型を持つこと(一五二頁などを指すのであろうが、おもしろいことに、本書が主として扱う五つの資料文献の中、二音節名詞の四類と五類とが異なる型を持つことを証し得るのは、この『仮名声』だけである。四類・五類に適切な助詞の付いた例が不可決だからである。

本書には次のような興味ある指摘がある。即ち、

「ただ、細かい点で三音節シク活用の連用形と連体形を比較してみると、次のようになる。

『四座講式』	『補忘記』	『仮名声』
連用形	●●●○	●●●●
連体形	●●●○	●●●●

この結果によれば、『仮名声』は『補忘記』よりも『四座講式』に近い。これはどうか。現代の近畿方言をみると、京都地方では『補忘記』の型であるが周辺の方言では『仮名声』的であることがわかる。こうした点を考慮すると、多分『仮名声』と『補忘記』のちがいは、地域による微妙なちがいを反映したもので、

『補忘記』はあたらしい京都方言、『仮名声』は伝統的な周辺の方
言、たとえば南紀方言などを反映しているためだろうと推論する
ことができる。(二三八頁)

また、この『仮名声』の三音節名詞のアクセント分析をしたあと
で著者は、反映しているアクセント体系を理論的に再構してみると
次のようなことが言える、として

「地域的には文献の成立や各語の類別などからして、京都方言を
中心とした近畿アクセントである。」(一七三頁)
と、述べている。貴重な指摘として注目しておきたい。

本書を繙くことよって著者から学んだものは、確かに多い。し
かし、疑問に思ったり、もっとこうあったらと感じたこともまた多
い。些細なことでも、しかも散漫にでしかないが、申し述べて書評の
責めをふさぐことを許されたい。

○第一―五篇の個別的の研究に共通した構成、そして、各篇が他の文
献も夫々参照して独立した論文の形になっていることについては
既に触れた。当然のことながら、全篇を通してみると重複が多い。
しかも箇所により記述内容のずれが見られる。読む側から言えば、
ひとつの篇に凝縮して総合的に示されていたら、と思う。

○節博士一覽(記述)の章は、大変に見づらい。その最たるものは『仮
名声』だ。ここには墨譜の他に朱譜があり、しかも一語に四種も
五種も付いたものがある。本書は、

- (1) 墨譜だけ一種類で表記されたもの。
- (2) 墨譜が二種以上のちがった型に表記されたもの。
- (3) 墨譜と朱譜の二種、または朱譜だけで表記されたもの。

の三つに分類し、しかも()で墨譜を、()で朱譜を示す、と
している。(三四頁)

ところで、『仮名声』に限らないが、本書の節博士一覽は、語ご
とに、ではなく、節博士の型(アクセントの型)によって語の分属
が示されている。したがって、特に『仮名声』の場合に、一つの
語がどういふ種類の節博士を持っているかをすべて知ろうとする
と、煩瑣極まりないことになる。あとのアクセント分析に掲げら
れた形と対照すると、脱漏や校正ミスがかなり多い。著者は「あ
とがき」で、「やり残したこと」として「たとえば、五つの文献の
節博士の総索引を作成して巻末につけることなどは、その一つで
ある。」とし、「いつの日にか時を得て約束を果たしたいと念じる。」
(二三七頁)とある。是非実現してほしいところだ。『大疏談義』
の場合にも一部朱譜があるという(五六五頁)が、特別な扱いは見
えないし、また、上部の余白に同筆の譜の書き入れがあり、あと
で一括して論じることにし(五六二頁)ながら言及はない。

○文献が写本だったり、版本への書き入れ本だったりして、他本と
の校合ができないものもあるが、『開合名目抄』は他の版もありそ
うである。また、『釈論百条第三重』は、『釈論百条第三重読曲』
と対照する前に、『釈論百条第三重』そのものの版本と比較すべき
だろう。その語類に属する語がたった一例しかない場合も、その
語類のアクセントの型が再構されるのだから、尚更である。たと
えば、『開合名目抄』には、ホカニ(外)に(角徴角)の節博士が
ある。これを著者は、この文献に見られる唯一例の二音節5類名
詞として扱い(八二二頁)、助詞二が低く付いているから直前の音
節は下降調の(〇)であることが立証された、とする。(八二二頁)

つまり、○○(▽)型のアクセントの存在を確認できた、とする訳だ。ところで、このホカという語は、『仮名声』を資料とする第一篇では、第4類として扱われている。(一五二ペ)

○本書には*じるしが多様な意味で使われ、しかも付けるべきところにきちんとしていないことがしばしばある。*じるしが付いているものは、たとえば、「各類の所属語彙を通覧すると、その節博士に問題のあるもの」(二四九ペ)だったり、「朱譜でほかの表記もあるもの」(二七八ペ)や「推定形を示す」(八一五ペ)もの、さらに「和語、漢語をおして、『釈論百条第三重読曲』に共通する項目のある語」(四二二ペ)であったりする。特に、推定形の*じるしは、全篇を通して徹底して付けてほしかったところ。

○本書における「——時代以後」「——時代以前」、あるいは、「——期から」などの言い方で、解釈上混乱をきたしかねないものがある。先に紹介した、「資料の性格から見た文献の相補関係を示す図」と本書中の次のような記述とを対照してほしい。たとえば、『開合名目抄』は、「時代的には、室町中期から後期にかけての京都アクセントを反映したもの」(一一七六ペ)として位置づけられており、『補忘記』に見られる和語のアクセントは、「時代的には、室町中期から江戸初期にかけての中世末期のもの」(一一四三ペ)とされ、また、『補忘記』全体についてであろうか、「この文献の資料的な時代性については、一応、室町末期から近世初期という幅で考え、そこにある一つの体系を反映しているものと見たい。」(一一七二ペ)とあり、さらにまた「結論的に言って筆者は、現在の立場として、この文献の和語のアクセントについて、室町後期から江戸初期のものともみている。」(一一七六ペ)とある。「室町中期から」と「室

町後期から」とでは、明確に異なることばであるが、作図上は同じになってしまう場合があることをこの図は教えてくれるのであろうか。

○『補忘記』に関して、たとえば「節博士の分析は『補忘記』所載の和語全体について行う。」(九四五ペ)のように、「和語全体」という言い方がよく見えるが、これは誤解を招く不正確な言い方ではなからうか。というのは、実際は「節博士の記述の範囲は、『補忘記』(貞享版上、元禄版天地)所載の和語につけられたもの全部とする。」(九四七ペ)とあるように、貞享版で言うと、下巻の和語は含まれていないからである。勿論、本書中に下巻の和語のアクセントを時に参照しているけれども、序でながら、下巻の論議の実際篇に見える節博士は、一部を除いては扱いかねて研究がない。後に触れる「初重・二重・三重」にも関連するが、不明なところが多い。

○『仮名声』には昶恵という人の手になる題辞があるが、「昶恵については、その伝記は不明である。」(三三二ペ)とある。しかし、この昶恵は、高野遍照光院第三十四世昶恵彦春房のことであろう。彼は天明四年(一七八四)五月三日山王院における論議の精義者となり、天明八年には左学頭に、そして寛政六年(一七九四)秋七十二歳で没している。『仮名声』の奥書に「中院伝雄」「増仁諦中房」の名が見えるが、前者は昶恵に学んだ人であり、後者は議論や声明を善くした人である。『仮名声』は安永九年(一七八〇)写だといふ。

○『仮名声』には墨譜の他に朱書や朱譜があり、墨譜の始まりに朱で「宝」「寿」と記されているものがあるという。これについて次

のような記述が見える。

「この朱書の漢字が、はたしてどのような意味をもつものか、まのところ明らかではないが、音譜に付けられているところをみると、口伝の流れを示す符号であろうと推測される。」(五六頁)

これはおそらく「宝門」「寿門」、つまり「宝性院流」「無量寿院流」のことであろう。この「宝門」「寿門」については、著者自身『中世国語アクセント史論考』四〇六ページで既に解説したところである。

○『釈論百条第三重』に関連して三九六ページから三九八ページにかけて「初重」「二重」「三重」という用語についての解説が見える。そこでは一般声明における初・二・三重と同じ意味、つまり、音域を表わすものとして解釈されているが、論議においてはそれだけでは解けない。著者も認めているように、論議には「四重」「五重」の用語も見られるからである。『補忘記』下巻に見える初・二・三重についての著者の説明はいかにも苦しい。論議における「一重」の原義は、論議の重ね方、精しく言えば、何重に問答を重ねて決拍を下すかに関わる用語と思うが、いかが。

すでに与えられた紙幅もとづくに尽きた。もはや、徒らなことばをもてあそんだことをお詫びするほかない。

最後に、論議に関して次の二著があることを記しておきたい。何れも本書発刊前のもの。

(一) 『長谷論義——真言宗豊山派伝法大会——』

(レコードと解説。平野健次・高橋大海監修。解説は平野健次ほか。

(二)

東芝EMI株式会社、一九七九
『真言の教学——大疏百条第三重の研究——』(上・下。勝又俊教編著。国書刊行会、一九七七)

——国際基督教大学准教授——
(昭和六十年十二月十七日 受理)